

論文

孫文と大月薫・宮川富美子

久保田文次

1981年のある日、先輩の鶴見尚弘氏（当時横浜国立大学教授）の紹介により、筆者は宮川富美子氏・同東一氏及び杉本絢之助氏の来訪を受けて会談した。用件は富美子さんは実母大月薫（のち実方姓）と孫文との間に生まれたのだが、その証拠を探しており、筆者に援助して欲しいということだった。筆者は当時、外務省外交史料館所蔵の「各国内政関係雑纂 支那の部 革命党関係（亡命者を含む）」のコピーをとり終わった直後であったので、外交史料を精査すれば希望に答えられるかもしれないと考えて、応諾したのであった。

当日、富美子さんは実方薫さんの談話を記録して、宮川東一氏に宛てた実方元信（薫さんの再婚先元心氏との長男）氏の書簡、薫さんの弟大月史郎氏が描いた孫文住居のスケッチ、元信さん逝去に関する新聞記事の切り抜き、作家の立野信之氏が書いた文章等を持参された。私は元信さんの聞き書きが孫文の当時の動静と基本的に一致していること、元信さんの書簡や富美子さんの態度が真摯であることを感じたので、調査をお引き受けし、その後も宮川家を訪問して、次男の弘氏の協力をも得て、作業を進めた。ところが、期待した外交史料には「浅田ハル」の情報は何箇所か出てくるが、大月薫の名前は見つからなかった¹。

神戸華僑歴史博物館の館長であった陳徳仁氏に報告・相談したところ、横浜華僑にも詳しい陳氏からそれは多分本当の話だと励まされ、関連する重要情報も教えていただいた。さらには、共同通信社神戸支局（当時）の松尾康憲記者をも紹介され、松尾氏の取材に応じ、確実な証拠はみつからないが、確度が高いと語った。松尾氏も孫文に興味をもち、関連調査も進めていたのであった。私の予想ではせいぜい『神奈川新聞』か『神戸新聞』に掲載されるくらいだったのだが、ささやかな記事でも読者の反応によって、調査が進展し、また、他の孫文関連の情報が得られることも期待できた。ところが1984年8月18日には共同通信配信先の新聞（産経以外は主として地方新聞）ばかりか、朝日・読売・毎日・日本経済等の全国紙が察知して、筆者や宮川家に電話取材等を行って、大々的に報道した。筆者は日本のマスコミや読者層における孫文への注目の度合いがまだまだ大きいことをあらためて認識したのであった。

1985年には陳徳仁氏は安井三吉氏との対談で「孫文の研究者の中には宮川富美子さんの存在をうすうす耳にしていた人がいましたが、さまざまな事情で確認し発表するという機会がなかったようです。」と語られ、松尾記者や筆者によって「確認された」との評価をされ、「こ

れからは新しいエピソードとして伝わるでしょうね」と結ばれた²。陳氏からは指導・激励を受けただけに、この発言はおおいに嬉しかった。

また、台湾では、すぐに、筆者の判断を「でたらめ」だと非難する論文が有名な雑誌『伝記文学』に掲載された³。中国大陸でも孫文関係の国際学会でマスコミの取材を受け、どうしてこのことを知ったのかと反問すると、海外新聞の重要ニュースを要約して幹部クラスの内部参考に供する『報刊文摘』で知ったとのことであった。帰国後、宮川弘氏からそのもとになった香港の新聞『明報』を送られ元の記事⁴を見ることができ、台湾を含めた反応の速さにこれまたびっくりした次第であった。

台湾の有力雑誌が筆者非難の論文を掲載したのは、中国国民党統治下で孫文を「国父」として殆ど神格化するまでになっていた状況で、孫文が日本人女性と関係があった、などということはその神聖なイメージを汚すもので、許せないという気持ちからであったと思われる。当時の状況からすれば防ぎえないことであるが、やはり、反応の速さと激しさには驚かされ、逆に衝撃の強さを思い知らされた。一方、中国大陸でも全体的に孫文は偉大な革命の先駆者として高く評価されており、また、一般に最高指導者のプライバシーに触れることは好まれていない。それだけに、公表には慎重さも必要であった。それでも、広東省社会科学院のニュースではこれに関する筆者のインタビュー記事を翻訳掲載した。こうした状況にあるということは、調査結果の公表にあたって、考慮しなければならなかった。状況によっては証言者や関係機関に迷惑を及ぼしかねない、複雑微妙な問題を

かかえていたので、当時の新聞発表では、史料・論拠や証言者のすべてを公表することは控えざるを得なかったのである。

ところが、1995年筆者は台北の中央研究院近代史研究所の公式の招待をいただいて、国際学会に出席した。宴席で黄福慶氏の紹介により、伝記文学社社長の劉紹唐氏にお会いした。私が『伝記文学』で罵倒された久保田です」と名乗ると、劉氏は「現在は問題ない、今後も研究を続けて良い」とおっしゃった。最近では国民党直轄横浜支部が出版した『国父与横浜』も、1995年以降、筆者の記事を翻訳掲載し、大月薫のことも大きくとりあげられるようにもなった。したがって、発表に関して過度に憂慮する必要はなくなった。

筆者には一面ではこの調査を研究としてどのように位置づけるかと言う点にも悩みがあった。筆者はもともと、男女間の機微に疎いのと、英雄偉人のプライバシーをあからさまにすることにどれほどの意味があるのか分からなかったからである。しかし、情報の公開度が高い日本では、明治天皇をはじめ、伊藤博文・山県有朋・桂太郎・西園寺公望等の元勳クラスまで、女性関係の話は広く一般に流布されているが、そのことのために処罰されたことは余り聞いたことがない。日本では記録や噂から状況を察知し、かつ調査能力を備えたジャーナリストや作家から、孫文のプライバシーを守りきることは、まず、不可能に近い。宮川さんの要望する「親探し」の調査依頼に応ずることは当然であるが、その成果を研究としてどのように処理すべきかの問題には悩んだ。

その後、東京で開かれた孫文関係の研究会(出

席者の多数が台湾から)に出席したところ、藤井昇三氏の発表の際、参加者から、宮川さんの件についての質問があり、説明のお鉢が筆者に回ってきた。私が余り気乗りのしない説明をしたところ、台湾からの留学生で日本大学芸術学部でシナリオの勉強をしていると言う質問者が「愛情問題は人間の一生の大問題であり、歴史は愛憎によってつくられるのである。もっとも重要な愛情問題を抜きにして、歴史が書かれるというのか。歴史学者は愛情問題を直視すべきである」との長広舌をふるったのが、考えるきっかけとなった。また、北京大学の歴史学部で本土の学者の見解を聞こうと思って話をして、今日の「フェミニズム」の観点からは大いに問題である旨を発言したところ、「多年異国で亡命生活を送り、明日をも知れぬ命で革命運動に没頭している男に、そういうことがあっても良いではないか。今の価値観で目くじらをたてることはない、歴史は直視すべきだ」との意見もいただいたのである。

このように、大月薫さん・宮川富美子さんに関して発表する環境も改善され、私も研究・発表の必要性を当初より強く認識したので、この際、一段落をつけることにした。第一には、故宮川富美子さんのご要望に答えることであり、第二に十分な説明なしに「世間を騒がせた」ことへの「罪滅ぼし」の意もある。第三に当時公表を憚った史料や事情を明らかにし、また、その後に発見した補強史料をも提示して、多くの方々の教示を得たいと思う。なお、大月薫さんも、宮川富美子さんともに故人であり、歴史叙述の対象とするので、以下では特別の場合を除き、敬称は省略することにする。貴重な助言

を頂いた他の多くの方々に対しても同様とするので、ご了解をお願いする。

一 宮川富美子の親探しの旅

宮川富美子(1906-1990)は、鮮魚小売商宮川梅吉・カネの娘として育った。小学校の成績はいつも級長を勤めるほど抜群であったが、高等女学校にも進学せず、家業を手伝っていた。1927年には大沢吉次を婿養子に迎え、父母・夫と共に家業・家事にいそしむことは従来どおりであった。ところで、娘時代から、自分はどうも宮川家の実子ではないという噂が耳に入っていたが、父母にそのことを尋ねることも憚られたし、結婚後も夫の手前もあり、公然と聞き質すことはできなかったが、実の母親・実の父親が誰であるか、知りたいという考えが次第に強くなっていった。ただ、宮川の両親が養父母であることは、戸籍簿で判明し、また戸籍上は大月金次(号素堂、以下素堂と表現する)の四女であることも判明した。さらには、親類のおじさんのようにしてしばしば宮川家を訪問し、養父母と談笑し、富美子に特に優しくしてくれた素堂が、実は父親でもなくて祖父であった。

宮川の父母も大月素堂夫妻も実父母でないことがわかったが、それでは実の母は誰であるのか。この問題について、実母は素堂の長女で名前を薫と言うことが判明した。ただ、第二次世界大戦中に、富美子は夫と共に大月家を訪問し、大月家の歴史と由来の説明を受け、母方の系統の理解を深めることはできた。しかし、父親が誰であるかについてはついに説明はなかった。

その後、母親が栃木県足利郡御厨町上渋垂（現在は足利市）の東光寺の住職実方元心に嫁していることもわかった。素堂は当時東光寺で、娘一家と同居していたからである。

実母の姓名・住所がわかったまでは良かったが、富美子の疑問はなかなか晴れなかった。父親は誰なのか、なぜ、教えてくれないのか。母親はなぜ娘を養女に出して、多年音信不通のまま自分を放置していたのか等について、疑惑や恨みが残っていたからである。しかし、「満洲事変」以降、第二次世界大戦の終了まで中華民国は日本の「敵国」であったから、父親が果たして孫文であったとしても、「敵国」の元大統領の娘だという話題は、憚らねばならない時代であった。河野密は日中全面戦争勃発後の日本の東北地方のある町の中華料理店の例として以下のような話を披露している。警察が「お前の家にかけてある孫文の写真を外すならばそのまま商売を続けても宜しい、それができなければ、気の毒ながら退去して貰はなければならない」と通告したところ、店主は、「孫文先生の写真を外す位なら、商売を止めてもしかたがない」といつてさっさと引き揚げてしまった、という話である⁵。

孫文と大月薫との間をとりもった温炳臣は盧溝橋事件後の1937年12月、蒋介石との通信の嫌疑で弟の恵臣等中国国民党黨員約40名とともに日本の警察に逮捕され、18日後にやっと釈放された。1938年には温炳臣が幹部であった中国国民党横浜支部も解散に追い込まれていたほどである⁶。宮川富美子の父親が孫文らしいとわかっている、調査・説明・公表は非常に困難で、ほとんど不可能であった時代の情況

は理解できるであろう。

第二次世界大戦が終わって三・四年たって、横浜の親戚や華僑からは富美子の父親が孫文だということが耳に入るようになった。やっこのようなことが話題になっても差し支えない状況になったのである。富美子はおも、母親が自分から離れていった事情を知ったり、父親が孫文であるという確証を得るために、また、母親と対面したいという要求を実現するための努力を続けた。実方薫の長男元信は宮川東一と同世代でもあり、両家の長男同士の通信・交流が始まった。元信は仏教布教のためのブラジル渡航を目指していたので、準備や手続きのため、上京することがあり、その時には、東一の友人と名乗って、横浜の宮川家を訪問することもできるようになった。

一方、足利の東光寺の方でも、薫や大月素堂の口から孫文のことが話題にされる様になり、周辺にも噂が流れるようになった。しかし、富美子が希望していた具体的な事情が伝えられたのは、ブラジル行き直前の実方元信が薫から聞き取りをして、それを東一に書き送った1956年秋のことであった。同じ頃、大月素堂も温炳臣に聞けば事情がわかるとの書簡を宮川東一に寄せた。2・3年後、足利市覚本寺の三国浄春住職（御厨公民館長）が薫から聞き取りをした録音テープを残した。まず、これらの資料を紹介する。

二 実方元信・大月素堂の書簡

実方元信書簡がもっとも重要だと思うので、

以下に、全文を紹介する（〔 〕は筆者注）⁷。

先日はごちそう様でした。小生早速母と話しあいましたが、小生としては努力したものの結極〔局〕今の所母は色々の問題（理由）で皆さんには申しわけないが、上京のお話には応じかねるとの事、止むを得ません。母の身にもなってお考えいただければ幸いと存じます。

しかし母は古い胸の痛みに涙をふきふき語ってくれたから、それを記録しました。そのおつもりで読んでいただきたい。尚、この不幸な事実により三十六才まで苦しい生き方をして、終に無名の宗教家と結婚したが、心のわだかまりはとうとう解けなかったのです。ついでに申し上げますが、当時の母としては文子さんには自分の全財〔産〕をささげ、さらに働いて送金したがどうにもならなかったと云うて居ります。孫氏からもらった指輪等も送ってやったと云って居ります。お含みおきのほど願えます。

以下書き下します。

- ①明治三十一年秋（母十二才）に父（大月素堂）の知合の温炳臣氏と孫氏宅にあそびに行ったのがそもそもの運命のはじまりで、この時横浜長者町の大火でやけ出された母の一家は山下町水町の石造家屋で上は（ニカイ）母の家、下は孫氏の家と云う一屋同住の生活を送っていた。
- ②同年父の商売の関係で永興隆の貸家に転居した。この二階にユビの無い人（革命者の中〔仲〕間だったらしい。後中国本土で刺された話を聞いた様に覚えて居る）が住ん

で居た。

- ③その後前田橋通りに転居したが、その頃温氏は度々母の家を訪問した。中山先生（孫氏）もたまに來訪した。孫氏をシンサンと呼んでいた。
- ④明治三十四年（母十五才）の時、温氏から孫氏と結婚する様に申し込まれたが、未だ女性としての生長がなかった為、母の父・母がおことわり申上げた。
- ⑤明治三十五年十月、孫氏直接の申込により婚約、同時に内縁結ばる。当時横浜高女在学、但し父宅に住居し、別居のかたちをとって居た。
- ⑥明治三十六年春、十七才の時、孫氏の希望に従い共立英和女学校に転校。
その後孫氏の行方は不明の事多く、米国・ハワイ・又は仏領印度支那ハノイからの手紙を何度か受け取ったが送金はとだえた。
- ⑦明治三十八年八月初旬（母十九才）來日、このとき文子（文子と命名した）を妊娠〔娠〕、孫氏は同月再び国外に姿を消したが、これを最期に再会の時を得なかった。孫氏は行方不明のまま、月日は流れよるすべもなかったので、永興隆超氏の忠告及び父の意見に従い、静岡銀行頭取三輪新五郎の末弟三輪秀司と結婚した。
- ⑧後、革命成就後來朝の折、温氏を通して再会の機会をあたえられたが、病気の為知人酒詰氏（帝劇支店長）を代理人として式に参列してもらった。
- ⑨この時、孫氏と母の関係が大小新聞によって報道されたから、当時の新聞が手に入れば、参考になる。

尚、手紙は大切に保存して居たが、関東大震災の時焼失した。超氏は手紙の代筆及び訳文をしてくれた人であるから、細部に渡って理解してくれていたが、年令からして亡くなったと思う。温氏は内情を良く知った大切な証人であったが、当時の国情からして、内々の事として居た為、終に今日迄この事実は日の目を見ずに秘話として残されていた。

又、先日のお話の周氏については思い出せないが、ニックネームがあったらお知らせ下さればわかるかもしれない。（かりに温氏はヤカンというニックネームを持っていた。熱すると雄弁家であったからこう呼んで居た）

孫氏は必ず訪問の時は歩いて来たから、運転手については何も知らない。

以上書き上げましたが、どうしても会見したいとお考えなら、足利までおいで願いたい。それから、私としては一生懸命やってみましたが、手が出なかったのですし、もはやこれ以上お話しして居る余か〔暇〕がありません。終戦以来父の死と姉の嫁入と自己の勉学と寺の復興と何時でも一人でかたづけて来た私だが、そして貧困と戦いぬいて来たつもりの私だが、ブラジル行きのおくれて居る今日では、さすがに内心つかれきって居ります。

たまたま困苦の余り、決心のグラツキさえあるこの頃です。最期迄苦勞して日本をはなれる私にかわって、むしろ、全てを忘れて、この老いた母になぐさめの言葉だけでもかけてあげて下さいと申し上げたい位です。母は今日迄苦しみにたえぬいて生きて来た方です。

け〔っ〕して楽な道を求めて子供をふみつけて来た方ではありません。

このものやわらかい人柄に会えば、必ずその苦勞のあとがおわかりになるでしょう。この事だけでも、吾々子孫として誇るに足る事実であります。

願はくは賢明な貴方の意志によって、この母の為に今後の安らかな精神の会得の為に祈って上げて下さい。

先づは要領を得ずも書き下しのままにて御無礼乍ら一紙さしあげます。

敬具

宮川東様 御家内御一同様

実方元信

宮川富美子によれば、文中の静岡の銀行家の弟との破婚は孫文からもらった手紙や装飾品などが露顯したことが原因であった。また、富美子次男の弘が薫から聞いたところによると、孫文は薫に対して、中国に昔「大月氏」という国があったと話したという。

孫文と大月一家との当初の住所(温炳臣の家)については、大月史郎(素堂の弟)が描いた絵葉書大の住居のスケッチと略地図(1966年2月1日)には「横浜市中区山下町121番地」と記されている⁸。

同じ頃の大月素堂の宮川東一宛書簡は、孫文との関係を次のように述べている⁹。

貴君母孫文娘の事を明ルクスル事ニ尽力シテマス。謂ハ孫文の文の字以文子故、明確ニ示シテ行タイト支那大使ニ迄書信ヲ出シテマス。証明人八十才以上故、其の名ハ温炳臣ヲ

大使館へ訪問シテマス。其内渡米前ニアナタノ事ニ孫文ノ娘落イン〔落胤〕文子ノ事運動シテマス。

本名孫逸仙同人出生地は広東ヒンサン県中山村ノ人 革メイ主 孫文ト云ウ名デ 此人の学名医学士デス。ハワイニサトー畑沢山持テマス。数十通の書カン皆戦火デ皆失イマシ〔タ〕。写真モ失イマシ〔タ〕。筋、文子の由来由来〔ママ〕ハ是迄一寸お話シマシタ。幸ニ「温炳臣」居レバ私モ立合マス。其外ニ証明ヨリドコロアリマセン。……孫文の孫東一君母は今カスカニノコリ居ル実方薫デス。一寸筆紙ニ尽〔以下本文切れ〕

サヨナラ

薫父字〔ママ〕大月素堂

宮川東一様

昭和三十一年十一月廿一日

筆者は大月素堂の宮川家宛て書簡を何通か見ているが、いずれも達意の文章であり、祖父と孫娘との間柄を公然と名乗ることができずに、しかも宮川家の養女となった孫娘を気遣う真情溢れる文章である。しかし、素堂がこの手紙を書いたのは96、7歳の高齢（1960年100歳で死去）時であり、文中に「心中何かとミダレテ文章も字も出ケマセン」とあるように、仮名遣いの乱れや文意不通の箇所が多いが、大体の論旨は理解できる。この書簡は元信には内緒である旨も書いてある。

次に三国浄春が実方薫から聞き取りした時の録音を復元し、実方元信書簡と重複する部分を除いて、要点を紹介すると以下の通りである¹⁰。

私が十一くらいの時、横浜に大火があり、その時横浜全部が焼けて、家が無いので、父が輸出をやっており、その輸出先の方が、控えの家があるからいらっしゃいと言ってくださり、行ったのが孫文の二階でした。私達が二階、孫文が一階で、今のアパートのような大きな家でした。私は子供でいたずらでしたから、二階であばれて花瓶をひっくり返し、その花瓶の水が階下に落ちたんです。それが応接間で地図をひろげてみなさんで話をしている所へパチパチ〔ピチャピチャ?〕落ちたんです。すると、孫文の部下の温炳臣（その時は温炳臣さんは知らなかったですけど）が、二階に小言を言いに来たんです。それで謝りに行こうと言うんで、私は一緒について行った。それが初めてでした。そしたら、怒られるどころか、良い子だと言って珍しいお菓子—椰子の砂糖漬だの下さって、その時初めて会ったんです。それからまもなくお隣の家が空いたので、私の家がそちらへ移ったんです。

〔父親は絹物の輸出を営み、中国・アメリカ・インド等を相手とした。竹でつくった傘や絹の団扇、ハンカチもあつかった。〕

〔孫文のことを〕中山さんと言っていました。中山のきこり〔樵〕、その時分孫文は亡命者ですから隠れていました。孫逸仙と言いました。

〔シンサンとも呼んだが〕シンサンと言うのはむこうで偉い人のことをシンサンと言いました。

〔15歳の時、温炳臣、ついで自家の雇い人を通じて結婚の申し入れがあつたが、年が

かないので断った。その後自分で来て、明治35年の秋に「約束」、その時の隠れ家が日本の町の（私の家は山下町でしたが）孫文の家はお代官坂の穴ぐらのようなところでした。

〔孫文の希望で共立英和女学校に入学したが〕途中で行方不明になっちゃったんです。どこへ手紙だしていいかわからなくなってしまいましたね。その時はハワイに兄さんがあるのでハワイから手紙が来たこともありましたよ。その次はアメリカのどこでしたか、忘れましたけれど。為替が来たんです。月謝。〔学資を送ってくれたのかの問いに〕ええ、少しずつですけどね。

〔明治三十八年孫文来日、結婚、孫文の家は〕お友だちの二階を借りていました。山下町の警察のそばの西洋館の二階を借りていました。

〔何日間一緒にいたかとの問いに対して〕私は親の方に預けられていますから、往ったり来たりしましたけれど。それからまた間もなく外国へ行ってしまうました。それで、永興隆という取引先の御主人が、ああいう人はいつどこで死ぬかわからないからよした方が良く、と言うんです。あんな所へやらない方が良いつて。それで、そういう気持ちになっちゃったんです。

以上の実方元信の聞き書きに加えて、宮川富美子が薫から聞いたことを、補足しておく。

温炳臣宅への転居は大火後、「復興は遅々としておりましたので、知り合ひの中国人の超さんといふ人の家作が中華街山下町一二一

番地にありましたので、ひとまずそこに落着きました。」共立英和女学校への転校は孫文がクリスチャンだったのと、英語を勉強するため」であった。孫文が行方不明後、「手紙等は高野長雄とか中山樵と言ふ名前」で来た。1905年8月初旬には、「麻の詰襟にパナマ帽の孫氏」が訪れた。「今と違い日本の国体に合はない主義思想はその後段々と当局の警戒が厳しく、常に特高に注目されるのが気にかかり、母はあまり出なかったそうです」。

富美子の出産については、薫は次のように語った。

富美子の名は孫文の「文」から付けた。本当は明治三十九年五月に生まれたが、私生児になるのを恐れ、孫文の連絡を待っているうちに一年以上が過ぎた。結局、素堂の籍に入籍したが、戸籍上の誕生日、明治四〇年一二月一二日は孫文の生まれた慶応二年（一八六六）一十一月一二日の一二にあやかった¹¹。

帝劇との関係については、大月家の「中華貿易も思わしくなく、今の横浜の馬車道辺に帝劇の出張所をやっていたようです。帝劇の出張所の正式の名称は横浜市境町二丁目四十番地帝国劇場札売場と」いい、前売券とか総見の紹介等の仕事をして私の養育費を払っていた」（富美子手記）。

富美子はまた1913年の孫文訪日の時、正妻の「ルー夫人」の乗った自動車が、皇居のお堀に転落して怪我をしたこと、横浜の運送業者周〔朱？〕貽柳の話によるとその自動車の運転手

は周の知り合いであったとのことを筆者に語った。孫文（あるいは黄興）が日本から退去命令を受けて横浜の中里鉾泉に潜伏滞在中、大月素堂が依頼を受けて食料などを届けたことも聞いたと語った。

実方元信の実方薫からの聞き書き、大月素堂の宮川東一宛書簡、大月史郎のスケッチ、三国浄春の実方薫からの聞き書きを要約すると、以下ようになる。1898年横浜の大火で焼け出された大月一家は知り合いの横浜市山下町121番地の温炳臣の家の二階で一時避難生活を送った。薫のお転婆が一階に住んでいた孫文と知る機縁となり、1901年孫文からの結婚申込があったが断り、1902年、婚約し内縁関係となったが、1903年以降は孫文は外国にでかけ、通信・送金が途絶え勝ちになった。1905年8月、来日した孫文とのあいだに娘文子を妊娠、1906年5月出産した。しかし、間もなく孫文はまた行方不明となってしまった。1913年孫文の日本訪問時には温炳臣を通じて再会の機が与えられたが、病気のため実現しなかった。この後、親の意見にしたがって静岡の銀行家の弟と結婚、離縁後に実方元心と結婚することになった。

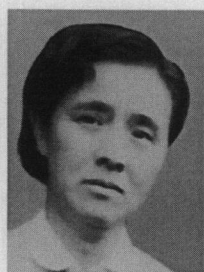
なお筆者は新聞報道後まもなく、宮川家から富美子の40歳前後の写真を提供されたが顔は孫文にそっくりであった。

三 証言者実方薫・実方元信・宮川富美子について

このような重要な証言を残した人々はどのような人物であるのか。世間には英雄偉人の子孫



大月薫
(13歳頃)



宮川富美子
(40代後半)

であることを説明・証明する際に、誇張・誇大の言を弄する事例が多いようである。誇張・誇大の言の中に真実が含まれている場合もある。それでは、大月素堂・実方薫・実方元信・宮川富美子の証言は信頼できるだろうか。大月素堂は残された宮川富美子宛の何通かの書簡を見る限り、孫娘を思う真情と宮川家との関係上、公然と愛情を吐露できないと言う状況を読み取ることができるが、ここでは省略する。富美子の手記によると、大月家の先祖は現在の茨城県の大庄屋で平将門を遠祖とし、幕末には幕臣であったという。「逆臣」といわれた将門だが、茨城・千葉や東京の人には尊敬する人が多い。薫の長女寿子の女学校時代の友人小宮トヨによれば一家は将門のことを平新皇（へいしんのう）と称していたという。敬意の表明であろう。富美子の手記は「時の悪政に反乱を起こした、今で言ふ革命でせうが、このような家柄ですので、母薫の父親が共鳴したのではないのでしょうか」と素堂の中国革命派との接近の動機を推測している。一方では娘に孫文と別れるように説得したことにに関して「幕臣時代の生活が心に残り、孫文の意見とは又違った意味があったかも知れません」とも述べている。

素堂は東京日本橋横山町が本籍で横浜へ出て、薫の証言のように前田橋の近くで生糸・絹織物などの輸出業をしており、この関係で華僑の温炳臣とも知り合いとなった。先述のように、辛亥革命前後には営業悪化し、薫は文子の養育費を稼ぐために帝劇出張所で働かなければならなかった。富美子の話ではいわゆる「士族の商法」で、商才には長けていなかったようである。妻キシは名古屋の鬼頭家の出で、浄瑠璃で有名な闇之森〔くらがりのもり〕八幡社の一族である。

薫は大月家の長女として育ち、高等女学校在学中に孫文に見初められた訳である。実方薫と何回か会った三浦千里は、「つつましく気品ある姿は今でも良く覚えている」¹²と回顧している。小宮トヨは、寿子・元信の少女少年時代の写真を筆者に見せてくれ、薫は優しい人で、料理がうまく、オムレツなどの作り方を教えてくれたと語った。小宮の話では、孫文と大月家家族との会話は、薫が通訳をしていたという。薫が通っていた共立女学校は英語のレベルが高かったのも、簡単な会話なら通用したと思われる。元信の前掲書簡に「このものやわらかい人柄」と述べ、「このことだけでも吾吾子孫として誇るにたる事実であります」と書いているのが、うなずける。

薫の夫となった実方元心（1888-1947）は旧名愛蔵、神奈川県鎌倉郡豊田村上倉田〔現在は横浜市戸塚区〕の出身で、長い間外国航路の船員をしていた。元下野新聞両毛支局長をした三浦千里（三国浄春の聞き取りにも参加）が小野清に語ったところによると、横浜で「静岡から戻って来た薫と知り合い、田舎で生活させた

らと、身内の人が元心さんで見合いをさせた」とのことである。小野の教示によれば「元心さんは人柄が良く、信望も厚く、農繁期には近所の子供を預かり、託児所を開いたこともあった（このことは薫さんの考えのようだ）」とのことである¹³。

長男の実方元信は1929年11月14日生誕、御厨小学校・旧制足利中学校を経て、1949年、大正大学仏教科を卒業、東光寺の住職となる。「僧職に情熱を傾ける一方で、御厨演劇研究会を結成、リーダーとして活躍している。彼の友人は「明朗かつ達な快男子」とも、「世話好きな心の温い青年」と伝えている。小宮トヨも同様な証言をしている。1955年、特派開教師としてブラジルに渡航、布教先でも熱心・親切ですこぶる評判が良かったが、1960年5月、不幸にして、強盗に殺害された（31歳）¹⁴。足利の名刹鑊阿寺の住職山越仁也はわざわざ現地の新聞をとりよせ、ポルトガル語の分かる人に読んでもらって事態を理解した。「元心・元信の父子はホラ貝が上手。特に元心さんは名人で遠くまで良く響いた。鑊阿寺の節分には欠かせない助っ人だった。節分の季節が近づくと、毎年のようにお二人を思い出します」と深い哀惜の念を語っている¹⁵。覚本寺住職、三国浄春師はじめ檀徒総代らは「惜しい男が殺されて残念だ」と語った¹⁶。

人望篤かった実方元信の死は地元の人々の同情を呼び、三国浄春が中心となり、贖金によって、同年10月に東光寺境内に観音像を彫った、高さ3メートルくらいの石塔が建立された。正面に「常為善友」とあり、裏側に「東光寺住職元信さんの死をいたみ、その願行をたたえて

十萬有縁の誠志ここにあつまる。実方元信さんを惜しむ会」と刻まれている。書は書家・詩人として著名な相田みつをの字である¹⁷。以上によって実方元信が真面目で、温かい人柄で、多くの人々から信頼され、慕われていたことがわかる。とても「でたらめ」をいう人とは思えない。

実方元信の供養の中心となった、三国浄春(1904-1970)は新潟県佐渡の出身、元信の大学の先輩にあたり、元信を父親のようにして可愛がったが、書・画を良くする歌人で地域の文化活動に尽力して信望の厚い人であった。後には、実方薫の聞き書きを録音し、貴重な証言を残した。

元信の碑の文を書いた相田みつを(1924-1991)は足利の出身、仏門で修行し、後に変な有名書家になった。子息の相田一人(相田みつを美術館館長)の話では、相田は三国を非常に尊敬しており、相田の絶筆は三国の言を思い出して書いた「正」の字であり、それにまつわる相田の文章もコピーを頂戴することができた。当時の相田みつをはようやく世間に注目されはじめたころであるが、いい加減な仕事はしないことでは定評があり、夫人は「基本的に自分の言葉しか書かない人間でしたので、実方元信様のことによほど心動かされるものがあつたのではないか」¹⁸と推測されている。三国が同じ仏門の人望厚い若い僧侶の死を悼み、三国を尊敬していた相田みつをが共感して記念碑建立となつたものである。以上によって、実方薫の証言を記録した実方元信・三国浄春、記念碑を書いた相田みつを、いずれもがみな誠実な人々であつて記録者として信頼性が高いことがわかる。

さて、宮川富美子については、そもそも、こ

の調査を筆者が引き受けたのは、その態度が真剣であつたからであるが、その後、何回も取材をして、実に聡明・誠実な人柄であると感じた。富美子の手記には12・3歳の少女時代の子供心に「当時の労使関係をあわれに思われた」事例を書いているので、要約・紹介する。

家の近くに富士紡績の工場があつたが、その前の道に銘仙の着物を着た若い娘が風呂敷包みに手をついて倒れているのを養父が見つけ、家へ匿い、事情を聞いた所、看護婦になるつもりで福島県郡山から紹介者に連れられてきたが、実際には紡績女工だったので、番人のすきをみて逃げ出したとのことだった。その晩は泊めてやり、翌早朝父が駅まで送つてやり帰郷させた。その後看護婦養成所に入ったとの礼状が届いた。

このような事件を養父ともども見聞し、富美子は「恐ろしい世の中だ」と思ったという。このエピソードからも、養父や富美子の親切さや同情心を読み取ることができる。

なお、富美子は成長後、東京府南多摩郡町田町〔現町田市〕の農家の出身大沢吉次と結婚したが、婿養子となつた吉次は以前に酒屋で勤務した経験があつたので、後に鮮魚店を酒類販売店に改めた。夫没後は次男の弘が酒店を継いだ富美子も家業にいそしんでいた。宮川酒店の取引先の王維九の言葉を要約・紹介しよう。

王氏は食堂を経営しているが、その酒は30年以上の間、宮川商店からとっている。富美子をはじめ店員である家族がみな優しく

親切で、自分のような外国人に対してもなぜ、こんなに親切丁寧なのかわからなかった。孫文との関係が新聞に報道された時、次男の弘が酒を届けに来たので、そのことを知っているかどうか尋ねたら、彼ははじめて「富美子は実は自分の母親です」と打ち明けた。富美子は情け深く親切で礼儀正しく、勤勉である¹⁹。

古美術商「不言堂」の坂本五郎は富美子の養父宮川梅吉の甥であるが、結婚の媒酌人を務めた富美子を「聡明な方であった」と述べ、「学問していたらさぞかし立派な人になっただろうと思った」と評している²⁰。

以上、実方元心・薫・元信の家族、三国浄春、宮川富美子等孫文との関係の証言者については、いずれも、地域で信望ある、信頼される人物であったことがわかる。したがって、これら情報を虚偽であるとして一概に否定することは、困難であると判断される。

なお、これら証言と当時の孫文関係資料との照合は次に譲るが、薫の再婚先の「静岡銀行頭取三輪新五郎末弟」云々について紹介して置く。三輪新五郎は1919年当時、現在の静岡銀行の前身の一つ「浜松銀行」の取締役副頭取をしている。同銀行の前身「芳川銀行」の専務取締役頭取は三輪孫平であり、新五郎は芳川銀行出身者として副頭取となったのである²¹。正・副の役職を「正」のように表現することは、世間に良くあることであり、静岡県にある銀行を静岡銀行と呼んだりすることも同様である。まして、浜松銀行は静岡銀行の前身の一つで、実方薫の談話当時は実際に静岡銀行になっていたのだから、薫がそのように述べたのもおかしくない。

むしろ、三輪の存在が確認されたことで、談話の信憑性を補強できると考える。

四 孫文関係史料との照合

上記情報のいうところでは、孫文は1898年の8月以降、横浜居留地の温炳臣の家に住んでいたこと、その住所は現在の横浜市中区山下町121番地であった。60年も昔の、しかも少女時代のことを、高齢になって回顧しているのであるから、記憶に混乱・矛盾・誤りがあるのは避けられないが、重要な点を孫文関係史料と照合してみよう。

実際に孫文は1897年8月16日にイギリスから横浜港に着き、はじめは居留地119番の陳少白方、あるいは137番に住んでいたが、1898年8月29日に、「同居居留地百二十一番館ノ内一戸ヲ借受ケ、昨廿九日同所へ移転セリ」と外務省外交史料館所蔵記録にあるように、1898年8月29日に居留地121番館、つまり、現在の横浜市中区山下町121番地へ移転した²²。温炳臣の弟温恵臣は1896年に来日したが、「兄の温炳臣が山下町121番地で両替商をしており、……そこへ孫文先生が明治三一年（一八九八年）住居を移して来ました。家は二階建のレンガ造りの西洋館で、一階二階とも四間、下に孫文が、私達は二階に住み」と書いている²³。実方薫の証言は、1898年8月以降、孫文が山下町121番地に住んでいたと述べていることにおいて、外務省記録とまったく一致し、そこが温炳臣の家であったことにおいて温恵臣の証言とまったく一致する。一階に孫文、

二階に温炳臣が住み、広い家であったことということも同様である。これらの事実は1982年の松本武彦の報告までは専門家の間でも知られていなかったことである。

もっとも、1899年の外務省記録は温炳臣を「五十番雑業温芬ナルモノ」と表現しており²⁴、1900年6月5日に孫文が「本日午後四時三十分横浜着汽車二塔ジ当市山下町百二十一番同国人温炳臣ヲ随へ上京セリ」²⁵と伝える報告が温炳臣の121番地居住が外務省記録に表れる最初である。「五十番」の温炳臣の住所は叔父の温遇貴と同一の住所であり、同所は炳臣の弟恵臣が勤務していたイギリス商社「ドッドウェル」の所在地でもある。実方薫の証言に「輸出先の人が控えの家があるからいらっしゃい」と言って転居した（三国浄春録音）とあるから、121番地は温自身の控えの家とも考えられる。

温炳臣（1866-1955）は広東省の出身で1878年以来横浜に居住、商業に従事、孫文の部下として、通訳兼護衛として活躍、その日常生活の世話をしていた。1901年の孫の南方熊楠訪問にも和歌山へ随行した。横浜華僑社会でも孫文支持の「壮士的人物」として知られていた²⁶。このような温炳臣であるから、孫文と大月薫との間をとりもつのもうなずける。

今でこそ孫文の伝記、年譜、研究書が巷に溢れており、外務省外交史料館が一般に公開されているので、孫文・温炳臣の同番地同家屋居住の事実は誰でも知ることができる。しかし、1956年頃には、そのようなことは一般庶民には、知る術もなかった。1945年以前の日本人による孫文傳を最初に出版した鈴江言一（王枢之）は1896年の駐イギリス公使館監禁事件

後、「この事件後の二年間をヨーロッパで暮した。」とか、「一八九九年のはじめ、孫文は日本に住んでいた」と述べるだけで²⁷、横浜のことは書いてない。高橋勇治は「多分一八九八年の終り頃日本に帰って来た。そして横浜市山下町二十一番地に寓居を構へ」と述べる²⁸。実態に接近しているのはさすがだが、季節や番地が違っている。

筆者の新聞発表を罵倒した論文は、日本外務省記録中の前記8月29日の孫文転居の報告を正しくも引用しながら、筆者がこうした記録を調査していないから「でたらめ」だと述べている²⁹。筆者はまったく反対に、この外務省記録を読んでいたからこそ、証言の信憑性が高いと思って、調査を引き受けたのである。ただ、新聞発表は論文と違って論拠・史料を詳しく提示できなかったもので、このような批判を受けた訳である。

実方薫が聞き取りに答えた頃、中国国民党が出版していた孫文の年譜は、日本外務省記録に依拠すると称しながら、外務省記録からの取材がまったく不完全で、たとえば、孫文と宋慶齡との結婚を1914年として記載しており、日本語で書かれた孫文伝記の多くもそれに従っていた。しかし、筆者は外務省記録や中国大陆や欧米の研究書によって、1915年のこととして是正し、1981年に公表していた³⁰。外務省記録によって、『国父年譜』の誤りを指摘した筆者を、外務省記録や『国父年譜』を見ていないと非難するとは、笑止千万である³¹。

1956年の実方薫の談話の後の1958年に国民党が公刊した孫文の年譜の「民国紀元前十四年、清光緒二十四年、戊戌（西暦一八九八年）」

の項には「夏、横浜に転居し楊衢雲と面会する。……先生は中国華僑商人は横浜に多く住んでいて、宣伝には便利なので、横浜の山下区の地に転居した」³²とあるだけで、温炳臣も山下町121番地もでてこない。しかも、1965年・1969年・1985年と増訂を重ねてきた筈の現行の『国父年譜』でさえも1898年の項ではこの記述を踏襲している³³。

中華街で育ち、革命運動に参加した革命史の権威馮自由は状況を知悉していた筈だが、1898年については、「孫総理は滞在先を横浜前田町一百二十一番地と定めた」と書いている³⁴。「前田町」の地名は存在せず、121番地のすぐ近くに山下町と本町を結ぶ「前田橋」という橋があるだけである。馮は実際には山下町121番地を念頭に置いていたと思われるが、それにしても、不正確であり、温炳臣のことには触れていない。それどころか、実は温炳臣自身から取材した筈の叙述も、1900年10月の惠州蜂起失敗後に孫文が温の家に住むようになったとするものや、1905年以降のこととして山下町121番地の私宅で同居していたと述べるものさえある³⁵。

遅くも、1900年6月の外務省記録に登場する121番地の温炳臣住所が当事者においてさえ、記憶・記録が曖昧であったことがわかる。大月素堂・実方薫も証人は温炳臣であり、温に聞きさえすればすべて判明すると述べていたのだが、温炳臣は薫の証言の前年1955年には逝去しており、確証を得る術はなくなってしまったのである。因みに実方薫も宮川富美子も温炳臣を「ウンペイシン」と呼んでいた。

しかしながら、1956年の実方薫の証言は自

分と孫文との関係ばかりでなく、①1898年、②横浜山下町121番地・③温炳臣・④孫文の4点を結びつけている点では、世界で最も早い情報だったのである。孫文の横浜居住に関するこの4点を学界で最初に明らかにしたのは上述のように1982年の松本武彦の報告で、外務省記録と温恵臣証言を総合したものであった。薫の情報は松本報告よりも20数年も早かったのである。彼女の情報は国民党党史委員会の専門家、馮自由のような党史の権威者よりも、詳細で具体的で基本的に正確だったのである。

筆者は薫が温炳臣のように専門家以外には知られていない人や事情を知っていたことを論拠として、新聞発表で「確度が高い」と述べたのだが、林初耀は温は横浜では有名人だったのだから、その存在を知っていたことだけでは証拠にならないと述べた。実方薫の証言は温炳臣だけではなく、温と年代・季節・番地・孫文とのセットで説明しており、それが、筆者らの辛亥革命研究会の機関誌に友人の松本が発表した文章で確認できたので、筆者はそう述べたのである。実方薫は当事者でなければ知りえなかった事実を、最初に証言したのであり、証言全体の信頼性を保証している。

実方薫の証言には間違いもある。温炳臣の家を「山下町水町」にあったとしていることである。「水町通」は海岸通（現在の山下公園通り）の一つ山手よりの通りであるが、徒歩で15分程度で山下町121番地に着く近距離にある。当事者や専門家の証言にも誤りや混乱があるのだから、彼女にだけ、厳密さを要求するのは酷である。

作家西木正明は小説ではあるが、1898年8

月13日発生の横浜大火の直後の14日に、大月一家が「恩炳臣」の家に転居したと設定しているが³⁶、孫文は8月29日に転居したのであって、この日には121番地にはいない。実方薫の証言でも焼失の直後もしくは即日との限定的記述はなく、宮川富美子は「復興が遅々と」していたので転居したと述べているので、大火後しばらくしてから転居の可能性もある訳である。もちろん、大月家転居の後に孫文が転居したことも考えられる。

実方薫は1903年頃の「隠れ家」としての「孫文の家はお代官坂の穴ぐらのようなところ」とも述べている（三国浄春聞き書き）。この住所のことは、外務省記録には見当たらないが、手がかりはある。馮自由は1903年に孫文が「山下町本牧橋附近に西洋式家屋一戸を借りて」、二階に孫文が住み、一階に廖翼朋・黄宗仰を住ませ、また「高野長雄」を名乗り、「高野方」の表札を掲げたという。馮は別の叙述では孫文の医学校時代の友人廖翼朋が山下町に「振華」という店を開いており、「国父と眷属は二階に寓居し」、廖と黄が一階に住んだと述べる³⁷。孫が廖を住ませたのではなく、廖の所に孫が住んだという点は異なるが、孫文が「家族」と同居と書かれているのも、大いに注目される。1903年7月22日に日本に戻った孫文は山下町121番地に落着いた³⁸し、その後もここを根城にしていたのであるから、この「山下町本牧橋附近」の住居は明らかに121番地とは違うし、『孫中山年譜』も別の取り扱いをしている。年譜や馮自由の叙述などでみると、1903年以降は外国・中国・東京から中国人の知識人・学生等が横浜へやってきて孫文と会談する数が急

増し、この勢いが中国同盟会結成へと続くのであるが、来客が増えれば、山下町だけでは手狭になるはずで、121番地以外に家屋か部屋を確保するのもうなずけることである。

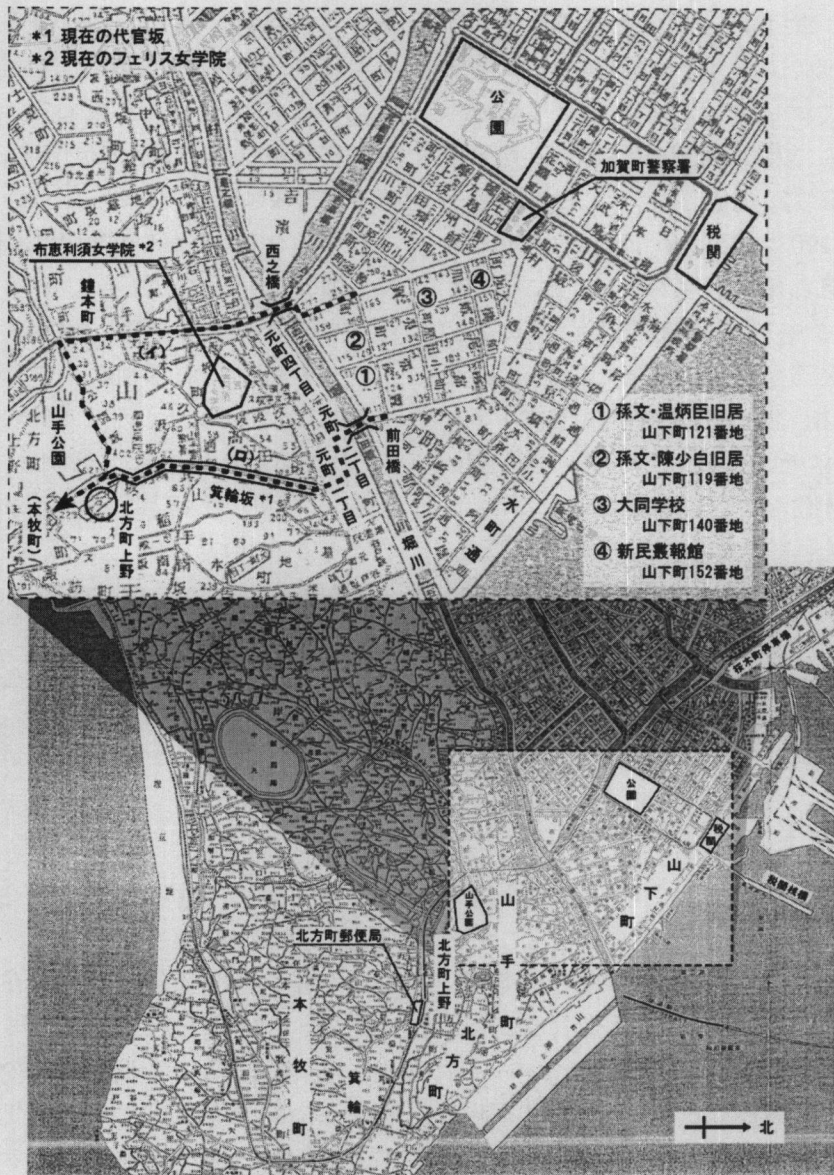
山下町内には「本牧橋」の地名も橋もない。現在「本牧橋」が本牧ふ[埠]頭と山下町を結んでいるが、これは最近年にできたものである。地名としての本牧町は山手の高台にあり1901年に横浜市に編入されたばかり、山下町から遠すぎて居住地としては考えられない。「山下町本牧橋」を山下町かその周辺で本牧に関連のある場所とか本牧町とを結ぶ道路線上にあること等の可能性がある。薫の弟大月史郎が描いたスケッチ裏面に121番地周辺の略地図があり、それには、山下町から堀川にかかる西野橋を渡って元町へ出る道路に「至本牧」との記入がある³⁹。元町へ行く道にこのような説明をつけたことは、この道を先へ進めば、本牧に達することが意識されていたからである。そして、山下町から山手の台地へ通ずる道は、本牧へも通ずる訳である。西野橋から下流で最初の橋が前田橋で孫文寓居から徒歩で10分前後、やはり、山下町と元町を結んでいる。代官坂は前田橋を渡り、元町商店街を横ぎったところから山手の台地へ上る坂道であり、登りきると、本牧へ通じる道に出る。代官坂は実際、横浜港や山下町・本町から本牧へ通ずる通路であり、坂道のため車馬を悩ませる交通の難所であった。現在は緩傾斜のトンネルで台地上の道に出ることができる。崖や坂に沿っての建築が多いので「穴ぐら」のような感じを与えるのもあると思われる。実際、現在でも一階を車庫としている家を見るとそういうこともうなずける。

横浜市中区山下町と本牧町との位置関係

(イ)「西之橋」は、大月史郎がスケッチで「至本牧」と書いた所。橋を渡り元町四丁目を左に見て電車通りに沿って坂を上ると、鐘本町・山手公園の辺で左折し、北方町に入る。この北方町と本牧町が一緒になって本牧町であったことがある。

(ロ)「前田橋」を渡って、元町二丁目、同一丁目を過ぎて「箕輪坂」を上ると、北方町上野で(イ)の道に合流する。この「箕輪坂」が現在の「代官坂」であり、「北方郵便局」の南、「箕輪」あたりが、「本牧町」の中心となる。

Cf. 「北方」と「本牧」が別の場合、「北方」と「本牧」が一緒で「本牧」の場合、双方あり。



『大正調査番地入横浜市全図』有隣堂出版部（1913年初版、1925年訂正三版）より作成

実は1982年の松本報告以後も筆者が論文発表を躊躇したのには、この「お代官坂」住居問題が未解決で、このまま孫文関係史料になかった証言を発表すると、薫の証言全体の信頼性が減少することを憂慮したのも一因となっている。宮川富美子も「お代官坂」のことが判ればと常に話していた。山下町は平地であって地下室ならいざ知らず、「穴ぐら」のような家を作る必要はない。近年、馮自由の叙述を読み直し、それと大月史郎のスケッチとを整合的に理解して、このように推定したのが、論文公開の一契機となった。山下町140番地「振華」居住は確実であるが、「本牧」と代官坂を結びつけると、このような推測が可能である。

さて、孫文は1903年までの間、東京・和歌山・上海・香港・シンガポール・台湾等へでかけて革命活動をすすめたが、拠点はつねに山下町121番地であった。実方薫は1903年春以降、孫文が行方不明となり、アメリカ・ハワイ・ハノイから手紙が届いたという。実際に孫文は同年7月22日に横浜に戻り、9月28日にはもうハワイへ出発、アメリカ本土へ渡り、さらに西ヨーロッパをまわり、やっと1905年7月19日に横浜へ戻ってくる⁴⁰。ハワイ・アメリカへ行ったことは、薫の述べるとおりでである。このときはハノイには行ってないが、1902年12月から翌年2月頃まで、フランス領であったハノイへ行っている。この程度の相違なら、薫の記憶が著しく混乱しているとは言えない。

実方薫は孫文が1905年8月初旬来日、このとき妊娠、「同月」孫文は姿を消し、このときが孫文との対面の最後となり、翌年5月文子(後の富美子)を出産したと述べている。実際には、

孫文は同年7月19日に横浜着、10月7日にはベトナムへ出発した⁴¹。この間に中国同盟会結成の大事業を達成したが、そのための活動は主として東京で行われ、東京に泊まったりすることが多かったが、山下町にも帰っていた。このことからすると、「八月初旬来日」・同月出国との説明は正しくないが、薫からみて自分との接触期間を表現したとすれば、説明がつく。ただ、宮川東一は薫から聞いた話として「明治三十八年十月七日には横浜発のフランス汽船カントン号で」出国したとも述べている⁴²。孫文の乗船はフランス船「カレドニア号」であって、「カントン号」ではないが、日付と船籍は合致している。

以上の他、孫文の兄(孫眉)がハワイにいて、ハワイに広いサトウキビ畑をもっている[実際には兄の孫眉]こと、孫文が中山樵・高野長雄の名で手紙をよこしたことなど、今日では良く知られていることも、実方薫・大月素堂は語っている。

実方薫は温炳臣が「熱すると雄弁家」になるので、「ヤカン」という綽名があったという。温恵臣の娘温瑞蘭によると「炳臣伯父はたいへん怖い存在であった」とのことである⁴³。あわせ考えると「壮士」温炳臣の姿が彷彿する感じがする。

1905年以降、孫文は中国同盟会の総理(党首)として、辛亥革命への蜂起準備に奔走していた。革命活動が活発となり、官憲の監視がより厳しくなっただけから妊娠した、或いは出産した日本人妻と会うことは殆ど不可能に近かった⁴⁴。辛亥革命後、1912年に中華民国臨時大總統に就任、後、袁世凱と交代し、「全国鐵路督弁」と

して鉄道建設を担当することになった。この資格で日本を訪問し、1913年2月13日に長崎着、2月14日に東京着、政界・財界・軍部要人と会談、在日中国人はじめ民間からも盛大な歓迎を受けた。22日、日帰りで横浜行き、28日に箱根へ一泊旅行の他は東京に滞在し、3月5日に横浜着、中華会館での歓迎会に臨み、6日華僑系の学校を訪問、国民党横浜支部の歓迎会に出席、7日に横須賀軍港を視察、以後、名古屋・京都・大阪・神戸・八幡・荒尾〔宮崎滔天故郷〕・長崎を経て帰国した⁴⁵。

実方薫が「革命成就後」の孫文来日時に温炳臣を通じて再会の機会を与えられたが、病気のため、帝劇支店長を代理人として「式に参列してもらった」というのは、1913年のことである。東京・横浜滞在中の孫文が温炳臣と連絡・会見したとの記録はまだみつけない。国民党横浜支部の歓迎会の集合写真にも温は写っていない⁴⁶。ただ、いわば「黒子」役を果たしていた温炳臣が、他人に気付かれることなく、何らかの形で接触をしたことは考えられる。帝劇支店は薫が富美子出産後、働いて養育費を稼いでいた職場である⁴⁷。ただ、「代理人として式に参列」との意味は良くわからない。1984年の新聞報道では、これを結婚式と理解したものもあるが、病気とは言え、花嫁のいない「式」（もしくは披露宴）は考えられないし、万一その場合があっても父母が出るべきであろう。第一、孫文は当時、公の行事に忙殺されており、国賓なみの待遇を受けていて、衆人環視の環境の中で、私的な秘話を露出するとは考えにくい。「どんな形式であれ、孫氏歓迎の儀式に薫が出席するのは都合が悪い」⁴⁸からである。

とはいえ、記録にはないから、私的な連絡がなかった筈と考えるのも無理がある。たとえば孫文は3月2日に宮崎滔天・菊池良一・山田純三郎と同道で国技館で大相撲を見物し、菊池の通訳で有望力士綾川と会話し、「孫逸仙氏と綾川の握手」の挿絵が新聞でも報道されたが⁴⁹、現行で最も詳細な『孫中山年譜』には記載されていない。3月9日の京都における歓迎会には「京大在学中の近衛文麿公の出席が人目を惹いた」⁵⁰が、年譜は「京都帝国大学等」の中国人留学生や地元名士の歓迎会には触れているが、文麿の名前は記載されていない。ここで挙げた2例は幸い他の情報源があったので判明したわけである。日本人にとって興味ある話題でも、要するに記者や記録者に興味の薄い事柄は、記録に残らないのも当然である。

実方薫の談話では「式」とあるから、表向きの歓迎会あるいは密かな会があり、支店長が薫の名代位の意味を込めて出席し、ちょっと挨拶・報告したということだろうか。マスコミの監視がはるかに厳しい現在でも、超有名人が監視の眼を盗んで「お忍び」を楽しむようで、私などが入るようなクラスの飲食店の色紙や写真でも外国の最高指導者や王族殿下をはじめ、スポーツ・芸能界の超スターが「お忍び」でつかの間の「自由」を享受された痕跡を知ることもある。マスコミの注目度が今ほどではなかった当時では、密かなささやかな私的空間を設定する可能性もあったのではないか。

実方元信は「孫氏と母の関係が大小新聞によって報道されたから、当時の新聞が手に入れば参考になる」と書いた。1984年の報道以後間もなく、筆者は『朝日新聞（東京）』紙上に

1913年孫文横浜訪問時の探訪記事を発見したので紹介する⁵¹。

一五年以前米国帰りの孫文が、二年余り飄零の身を潜めた百二十一番、前田橋から第一の往来を左に折れて間もない所の左側に、三軒同じ形に続いた真四角な洋風二階建の中間の家で……。

〔3月5日の来浜時〕横浜居留の国人四千は、中華新興の恩人、前大統領の禮を以て彼を迎えた。停車場から関帝廟につづく旗行列の歓声と、全街を撼す爆竹の轟きとを満身に浴びた彼……。彼は海岸のグランドホテルと南京町の歓迎場との往復に、燦やかな馬車の中から遥かにこの家を指示して、『ああ、十五年以前のホワイトハウスだ』と言った。……十余年前、ありのすさびのなぐさみに倦いて棄てられてから後、美しく悲しい思ひ出は、この春得意の彼が錦衣南京町に練込んだその日！……今は公園附近に容色よしの奥様と呼ばるる薫子が、遥かにその行列を見て正体もなく哭くづ折れたこと、……など、彼が折ふしの寢覚の枕に、思いの種となってい[ワ行]るであらう。

二年間の住まいというのは誤りだが、これによって、「薫子」という日本人妻がいたこと、山下町121番地が孫文との結婚の場所であったことが判明する。また1913年から15年以前のこととしているのも1898年の年代と符合する。宮川富美子によれば、「薫」という名は男性にもあるので「薫子」と呼んでいたとのことである。この新聞記事によって、薫の話が裏

付けられた訳であるが、孫文と薫との関係が地元の人々に知られていたことをも示している。また、この記事の存在も実方薫証言の信頼性を高めるものである。

帰国した孫文は宋教仁暗殺事件等により反袁世凱武力闘争を展開するが失敗して、同年8月にはまた、日本に亡命したが、来日後は東京で活動した。このころ孫文は「温炳臣の關係を通じて大月薫と再会したいと思ったが、薫は病気を理由として断った」⁵²という。しかし、実方薫からの聞き取りを録音した三国浄春は「かつて孫文の同志だった横浜に住む周胎柳さんなど何人かと会った時、外国から戻って来た孫文が薫さんの姿を求め実家や親類を歩き回ったという話を聞いた」と語ったという⁵³。以後は薫が銀行家の弟と再婚し、更に実方愛蔵と結婚し足利の寺院の住職の夫人となったのである。

なお、孫文のことを「シンサン」と呼んでいたが、「シンサン」は「先生」のことである。

宮川富美子の40歳前後の写真であるが、あるとき来日した復旦大学の姜義華教授に何の説明もなしに突然その写真をみせたところ、孫文の日本人妻のことを聞いていた姜は即座に孫文の娘だということを理解した。それほど酷似していたのである。実は2009年6月上海で姜と会ったときにも話題としたところ、彼もよく覚えていた。因みに陳徳仁も孫文の孫娘（孫科の娘）孫穗芬の写真と富美子が良く似ていること、特に口元がそっくりだとの感想を筆者に洩らし、また富美子にもその旨を手紙で伝えている⁵⁴。

宮川富美子が筆者に語った孫文の正妻「ルー夫人」とは盧慕貞のことであり、交通事故は実

際に発生した。筆者は沢村幸夫の回想記で「彼女の乗れる自動車が料らずも電柱に衝突して、相当重い怪我をした」⁵⁵ ことを知っていたのでこの話の蓋然性を信じたことも調査引き受けの要因となったのだが、以下に新聞記事によって概要を紹介する。3月16日、「ルー夫人」と「ニー夫人」・「ニー嬢」の乗った自動車が神田橋から南下中に和田倉門交番の前で北上中の市電と衝突しそうになり、ハンドル操作を誤って電柱に衝突し、車体は大破、3人の女性が相当重い怪我をし、聖路加病院に収容され手当てを受けた。彼女らは、当初姓名を名乗らなかったが、新聞社の調査によって上記の名前や夫・父親が判明した。記事は「態態 [わざわざ] 姓名を変えて盧 [ルー] 夫人と」称したと報ずる。自動車の所有者は横浜市相生町の池田徳太郎であった⁵⁶。「ニー夫人」とは宋嘉樹夫人で宋慶齡・美齡姉妹の母親倪桂貞、「ニー嬢」とは宋姉妹の姉で孫文の秘書をしていた宋霽齡である。

堀への転落事故ではなくて電柱との衝突であるが、要するに交通事故である。和田倉門は皇居の堀端であるから、お堀に落ちたという話と一部は共通する。運転手の姓名・年齢は記事にあるが、住所は書いてない。しかし車の所有者は横浜在住である。これによって、宮川富美子の証言もが大筋において誤りがないことも判明し、証言全体に対する信頼性も確保される。実方元信の書簡に「運転手については何も知らない」とあるのは、富美子が周（あるいは朱）という運送業者から事故の話を聞いたので、そのことを問い合わせたのに対する回答だったとも推測される。

大月素堂が潜伏中の孫文に食料などを届けた

ことについては現在のところ手がかりがない。孫文が潜伏しなければならないような事態があったとすれば、日本政府が孫の退去命令を出す予定だった1905年9月初めに頃と思われるが、孫文側が先に自主的な出国に踏み切ったのであった⁵⁷。ただ「退去命令」の件は秘密であったはずなので、大月素堂がそのことを知っていたとすると、興味深い。1905年夏が薫と孫文と最後の対面となった訳だが、その時は二人とも知る由もなかったであろう。

実方薫は孫文が高野長雄・中山樵の日本名を使っていたと語っている。この日本名は現在では専門家の間では常識となっているのだが、当時は一般にはあまり知られていなかったことである。筆者などは「中山」を「なかやま」と読みながら、「樵」は音読で「ショウ」と読んでいたものである。時々、日常会話では「きこり」と呼んだのではないかと考えて、それでは語感が奇妙に感じられ、悩んだくらいであった。孫文のことが良く知られるようになった現在では珍しくはないが、当時の地方在住の老人の知識としては珍しく、このことも証言の信頼性を補強するものと考ええる。

以上、実方薫・大月素堂の証言や実方元信・三国浄春の記録を中心とし、証言者の人物像を検証し、さらに、孫文の史料とを照合・点検してきた。細部には疑問・不明の箇所があるものの、大筋において、孫文の動静と一致していると判断できる。特に、1898年に孫文が横浜市山下町121番地の温炳臣宅に住んでいたことを、1956年（番地については1966年）に語っていたことは、証言の信頼性を保証するものである。

実は1984年当時に発表しなかったことを、発表できるようになった事情・経緯を以下に説明する。

宮川富美子が切望した確実な証拠を発見しなかったにもかかわらず、筆者が新聞取材に応じたのは陳徳仁が本当だと言ったからであるが、陳からは孫文の系統の人からの私信に「孫文には日本人女性との間に生まれた女性がいるが、氏名が分からない」という趣旨が書いてある部分を見せてもらった。このことが発表に踏み切る自信を与えてくれたのだが、私信であることと、当時の状況を考慮して、論拠としては言及しなかった。林初耀は同年8月19日刊の外字紙に孫文のアメリカ在住の親戚や友人が「孫先生には日本人妻との間に生まれた女兒がいたが、氏名は分からない」と言っていると報道しているのを、筆者の発表と受け取り、「話し手の氏名や時期が分からないのでは、証拠とするに足りない。」⁵⁸と非難したが、筆者自身は話してはいない。

しかし、前述のように香港の新聞『明報』やそれをもとにした中国の『報刊文摘』は「日本女子学院教授久保文」は孫文が「大月芳」と結婚したことを研究したと報じたあと、共同通信社では「アメリカ在住の孫中山の家族や友人は、以前から孫文には日本人妻の産んだ娘がいるが姓名は不詳である」と伝えている、とも述べている⁵⁹。『横浜華僑誌』もまったく同様な内容を記している⁶⁰。筆者が陳徳仁から見せられた情報、林初耀が引用した外字紙と表現はほとんど一致している。出所はほとんど同一であろう。

孫文と日本人女性との関係、特に大月薫との関係の話は、横浜華僑の間でもかなり流布され

ていたし、前述のように、大月素堂は中華民国の駐日大使館に、温炳臣を呼び出して調べてもらおうとしていた。宮川富美子の談話でも、国民党幹部や華僑有力者が宮川家に調査や聞き取りにやってきたという。国民党党史委員会・国史館から派遣されて調査に来た一人洪桂己が宮川家に宛てた書簡が3通残っている。「はじめに」で述べたような複雑微妙な問題があり、洪の調査期間が筆者と重なり、先方の資料を利用することは憚らねばならなかったから、発表当時は言及しなかった。現在では洪も故人となり、時間も経過して、問題もなくなったと思われるので、以下に要点を紹介する。そのうちの第一信は洪が東京滞在中に出したもので「中華民国として非常に貴重な資料を戴いて感謝感激にたへません。早速国史館から総統に報告されましたが結果はわかりません」とある⁶¹。第二信は「確かに孫文先生の子孫であることを信じます。」と書き、孫文先生の子孫に引合せたいとの希望を語り、「孫文先生在世中確か娘があることを知っていたのです」と書いている⁶²。

洪桂己の第三信は台北からの発信で、「前総統府秘書長との写真」を同封し、「私の報告も政府の公文書館には秘密文書として入れてありますが、御本家の」事情で公表できない状況だと伝えている。さらに「私としては個人的に信ずるも、日本政府の公文書にない為、今毎日九百万事件〔九百万件？〕の文書をさがしています」とも述べる⁶³。実は筆者は実方薫からの聞き書きのコピーを台湾事情に詳しいある人に見せて教示を仰いだことがあるが、洪はそのコピーを読んだものと見え、同信はそれについて「その中の記述は不確実で小説みたいな者で確

定できません。一国創始者の国父であるので、慎重を期し、確拠を得るのが必要です。私としてもその日のあることを確信し、努力研究に努めています」と書いている。実方薫の談話記録だけではたしかに「小説的」であり、日本の公文書等から「確拠」を得て慎重を期したいという洪桂己の姿勢は誠に良く評価できる。

筆者は洪桂己と電話では2・3回ほど話したことがあるが、対面したことがない。ただ、彼から台湾出版の『孫中山先生与辛亥革命』全3冊（1981年）を贈られたことがある。辛亥革命研究会での発表を希望していたが日時の都合がつかず実現できなかったことは、今でもたいへん残念に思っている。洪が大月薫が孫文の日本人妻であったとの「確信」と「確拠」との間で苦悩・努力したことに敬意と同情を表したい。それと同時に「確拠」を得ない内に「確信」を持ったのは何故なのかという質問をしてみたい気がする。いずれにせよ、洪の報告書を見ていない段階なので、筆者も確拠を得るためにさらに努力したい。

実は陳徳仁も実方薫の話は本当だと筆者に語っていたのだが、宮川富美子にも宮川家での取材（筆者同行）の後、「孫文記念館に来られる中国からの訪問者に対して確信を持って説明ができるようになった」と伝えていた⁶⁴。

ただ、新聞報道の際には論拠・資料を示さなかったこと、一部の情報源は公開しなかったことによって、疑惑・反論を招いたことは否定できない。今回は論拠・資料を明示し、公表しなかった情報源をも公開した。また、その後、宮川家から富美子の孫文そっくりの写真を提供されたり、朝日新聞の「南京町」探訪記事で山下

町121番地にいた「薫子」のことを発見したので、真実性は1984年当時より著しく強化されたと思っている。

おわりに

長い間、親探しの旅を続けてきた宮川富美子は1956年にやっと母の実方薫に対面し、父親が中国の革命家孫文であることの説明を受けた。事情・経緯を了解して、後に「長い間、私を人に預けっぱなしにして名乗りもしなかった母を恨んだこともありましたが、青春時代の恋のため数奇な人生を歩んだ母の立場を理解できます。」と語る境地に達したのである。

薫を妻とした孫文についても、「スケールの大きな愛国者を父に持ったことを誇りに思う」ようになり、二人の結婚を「生死を度外視し、艱難冒険の生涯を過ごす革命家の人生途上の一時的な休憩であった」と理解した。ただ、宋慶齡女史と結婚した孫文に迷惑が及ぶのを心配し、「秘話」として封印して、数奇な生涯を終えた母薫に対しては深甚なる同情を抱いたのも当然のことであろう。

父母が判明したことで、親探しの第一段階は終わった。有力者の仲介もあり、1980年には東一と同道、中国南京にある孫文墓地中山陵に詣でた。そのときの感慨を後に次のように語っている⁶⁵。

孫文の石像と対面した時は涙が止まりませんでした。こんな姿になってやっと親子が会えるなんて……と。私はよく鏡を見ます。子

供のころ、実の父を知らない養父母が私の顔を見て「この子はなんて目がくぼみ、額が広いのか」と言っていました。この顔が父の「遺品」でしょう。

第二段階の作業は父親が孫文であることの証拠を探し出すことであった。この過程で1972年には孫文・宮崎滔天を題材にした小説を書いていた作家の立野信之の取材に応じた。1981年に筆者に調査を依頼し、筆者は確度がきわめて高いとの判断で、1984年に新聞記者に公開した。新聞報道は予想をはるかに超えた大々的なものであった。これを契機として、宮川富美子が孫文の娘であることが、社会的に認知されるようになった。富美子はこのことを大変喜び、筆者にも過分の謝意を表してくれた。

作業の第三段階としては、調査結果を社会に発表することが筆者の任務として残された訳である。しかし、「はじめに」で述べたような事情や顧慮もあり、作業は遅々として進まなかった。富美子はその後は一層自信と自覚を持って酒飯店の家業に尽力していたが、1990年5月6日、孫文と同じ肝臓癌のためこの世を去った。行年82歳。葬儀の際には財団法人孫中山記念会（富美子は名誉会員）・孫文研究会・神戸華僑歴史博物館からの花輪が届けられたことは、上述の社会的認知の深まりを意味している。

いつも仕事の遅い筆者であるが、本稿が宮川富美子の生前に完成していたならば、その喜びはいかばかりであったであろう。今更ながら申訳ない気持ちでいっぱいである。一方で本稿を発表することで遅ればせながらの「罪滅ばし」（宮川富美子に対し、世間に対して）ができそ

うなので、一抹の安堵感も禁じえないのが、現在の心境である。

以上に大月薫が孫文の日本人妻であったこと、宮川富美子が孫文の娘であったことを論証してきた。孫文には盧慕貞という正妻がおり、盧夫人と離婚後、宋慶齡と結婚したことは誰でも知っている。宋慶齡が盧慕貞の子孫と良好な関係を維持していたことも良く知られている。実は盧慕貞からは妹のように、孫文の一族からは家族や親類のように待遇された女性がもう一人いる。陳粹芬（1874-1962）である。2009年日本でも上映された深圳電影廠製作の映画『孫文；100年先を見た男』（原名『夜・明』）では、1910年のシンガポールを舞台に活躍したヒロインとして描かれている。陳粹芬は香港生まれ、横浜で孫文と生活を共にし、また同志の世話も担当した。中国で出版された『孫文の親族・子孫』の中では「孫中山的夫人和伴侶」として、盧慕貞・宋慶齡の間に叙述されている。同書には孫文・盧慕貞や宋慶齡その他孫文一族との写真が何枚も掲載されている⁶⁶。陳粹芬は純粹の中国人であり、孫文の愛人兼同志として、孫文一家からも認知されていたことがわかる。

大月（実方）薫は日本人で中国語は話せず、少女とも言うべき年齢であったから、もとより、同志としての活動はできなかった。1905年中国同盟会結成以降、超多忙となった孫文と再会もできなくなった悲劇がそこにある。薫からすれば、相手がいかに世界的な偉人であろうとも、孫文との生活は辛い、悲しい思い出として、忘れ去りたい過去であっただろう。第二革命以降の孫文の再会の要望を断ったのもそうした気持ちからであっただろう。娘の富美子は親探しの

成果として事情を薫に聞き質したのだが、娘と晴れの名乗りを上げると同時に、「涙をふきふき」語らねばならなかった薫の心情は恨みも混じった悲しい気持ちであっただろう。

しかし、一方では、孫文・孫家の側でも全く薫のことを忘れていたわけではなく、氏名不詳ながらも女兒がいることは伝承されており、そのことが、筆者の研究の出発点となり、また、本稿の論拠を補強することとなったことも、上記陳徳仁・洪桂己の証言や香港の新聞によって明らかである。中国国民党駐横浜直轄支部が発行した『国父与横浜』が盧慕貞・宋慶齡あるいは陳粹芬を紹介すると同時に薫のことを紹介し、薫を「忍従」という東洋風の道德の体現者と評している⁶⁷のも、一種の認知行為であると思う。

薫は1898年に横浜山下町121番地に孫文が温炳臣と同居していた事実を最初に証言した人物であり、その証言を残したことは孫文研究に対する一つの貢献であると思う。数奇な運命に翻弄されながらも、健気に生き、良い子孫を持ったこの人に心からの同情を捧げたい。

本稿執筆にあたっては、特に以下の方々のご教示・ご援助をいただいた。末筆ながら、記して深甚な謝意を表する（順不同）。

宮川富美子（故人）・宮川東一・宮川弘・梅田寿子・陳徳仁（故人）・松尾康憲・小野清・相田一人・三国ひろ子・初谷浄淳・小宮トヨ・三浦克子・伊藤泉美・鶴見尚弘・杉本絢之助・松本武彦・小笠原謙三・安井三吉・武上真理子・板垣友子・劉維開・黄自進。なお、山下町と本牧町に関する地図については岩崎仁氏（京都工

芸繊維大学）のお世話になった。

久保田文次（KUBOTA Bunji, 日本女子大学名誉教授）

注：

1 調査経過の概要は久保田文次「孫文の遺児、横浜に健在」『一人から』6巻、1985年に発表した。中国語訳は小川寿美子訳「關於孫文遺女の調査経過」広東省社会科学院『社会科学情報資料』1986年5期；金世龍摘訳「關於孫中山遺女の調査経過」王良主編『国父与横浜』三集、中国国民党駐横浜直轄支部、2001年。なお、大月薫のことを最初に公開したのは筆者ではなく、立野信之「孫文の日本妻」『日本と世界の歴史：月報』第19巻、学習研究社、1971年、である。その中国語訳が王良訳「孫文的日本妻子」（前掲王良主編書。なお、宮川東一「孫文和母親富美子の関係」前掲王良主編書；宮川東一『日本に遺された孫文の娘と孫』商業世界、2008年、参照。以下文中の〔 〕の中は筆者による補足・訂正・説明の部分である。

2 陳徳仁・安井三吉『孫文と神戸：補訂版』神戸新聞総合出版センター、2002年〔1985年初版〕、60頁。

3 林初耀「一項幼稚無知離奇荒誕的顯然錯誤：日本久保田教授發表孫中山先生娶日婦研究結果之駁斥」『伝記文学』45巻6期、1984年。この論文は『関東華訊』37期、1985年、にも掲載された（宮川弘氏惠贈）。

4 「孫中山在日娶妻留下女兒被發現」『明報』1984年8月18日；「共同社談孫中山在日本的婚事：報刊文摘一九八四年九月四日」王良主編、前掲書〔注1〕。これとほぼ同内容の記事が『人民日報（電子版）』2009年2月28日付に「孫中山一生四個妻子：曾有位日本籍秘密夫人？」として報道された。この「旧聞」が改

めて報道されたのは深圳電影廠製作の映画『夜・明』（日本では角川映画によって上映、『孫文：100年先を見た男』の封切りと関係があるだろう。

5 河野密『孫文の生涯と国民革命』日本放送出版協会、1940年、15頁。

6 王良主編、前掲書〔注1〕、10-11頁。小笠原謙三『孫文を支えた横浜華僑温炳臣・温恵臣兄弟』八坂書房、2009年、参照

7 1956年11月ごろの実方元信より宮川東一宛書簡（宮川家蔵）

8 大月史郎のスケッチとその裏面の略地図（宮川家蔵）。『国父於横浜居住の房屋』王良主編、前掲書〔注1〕、175頁参照。ただし、同書はスケッチを明治三十八年に素堂が描いたとしており、略地図は載せていない。

9 1956年11月21日付、大月素堂より宮川東一宛書簡（宮川家蔵）

10 実方薫談・三国浄春録音「孫文に関する回顧談」、1960年代初め頃。これは、松本武彦が復元し、表題を付したもの。文中の〔 〕内は久保田による要約・補足である。

11 1983年11月29日付、宮川富美子が久保田に手交した手記。たとえば「孫文に『遺児』がいた」（『東京新聞』1984年8月18日）等参照。

12 三浦千里「ある女性の過去：孫文と薫さんのロマン」『足利文林』14号、1984年；同「ある女性の過去Ⅱ：薫さんと開教師元信さん」『足利文林』15号、1984年。いずれも小野清氏惠贈。

13 1984年10月4日付、小野清（栃木県）より久保田宛書簡。

14 「実方元信師を惜しむ会」（事務所は覚本寺）発行の地藏尊建立のための趣意書（B5版4頁、宮川家蔵）。三浦千里、前掲論文「Ⅱ」9頁。

15 三浦千里、前掲論文、とくに「Ⅱ」。

16 「実方師（御厨出身）殺される？」『下野新聞』1960年5月15日；「実方師は殺された」『下野新聞』1960年5月16日；「殺された僧は本県の人」（掲載紙不明の新聞切り抜き、宮川家蔵）。

17 前掲〔注15〕参照。

18 三国については、前掲〔注13-16〕参照。『三国浄春遺歌集』や『ビルマの塔』等の著述がある（三国ひろ子氏・初谷浄淳氏の教示）。相田については、2009年8月30日付、相田一人より久保田宛書簡。

19 王維九「国父孫中山先生海外の後裔」王良主編『国父与横浜』続集、中国国民党駐横浜支部、1998年、168-171頁。

20 坂本五郎「私の履歴書⑬」『日本経済新聞』1996年12月13日；坂本五郎『ひと声千両：おどろ木・桃の木』日本経済新聞社、1998年、68頁。

21 静岡銀行編『静岡銀行史』同行、1960年、705-707頁。

22 外務大臣伯爵大隈重信宛神奈川県知事浅田徳則報告「秘甲第七〇〇号 清国人ニ関スル報告」（1898年8月30日『各国内政関係雑纂 支那ノ部 革命党関係』）。筆者がこの調査を引き受けたのは、この外交史料をコピーしたからであつた。ただ、煩を避けるため、以下この外務省記録を典拠とする場合は一々注記せず、『孫中山年譜長編』の頁数で示すことにする。松本武彦「日本における辛亥革命の史蹟と史料（1）」『辛亥革命研究』2号、1982年、参照。筆者は松本の案内で1984年に現地踏査をしたが、その際同氏作成の資料『横浜探訪：旧居留地・中華街』1984年3月18日をも参照。

23 温恵臣「孫文は静な人だった」『有隣』114号、1977年。なお、温炳臣・温恵臣については小笠原謙三、前掲書〔注6〕；王良主編『横浜華僑誌』財団法人中華会館、1995年、参照。

24 陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上冊、中華書局、1991年、172頁。温遇貴は1899年浅田神奈川県知事の報告で「改革派〔孫文派〕ノ重ナル者」の一人として挙げられており、温炳臣は彼等に「使役セラルル壮士の人物」として描かれている。「五十番」をめぐる事情については小笠原謙三、前掲書〔注6〕、130-131頁、参照。

25 陳錫祺主編、前掲書〔注24〕、207頁。上京期日については同頁註を参照。ただし、同書は121番地を「百二十一丁目」と誤記している。

26 松本武彦、前掲論文〔注22〕；小笠原謙三、前掲書〔注6〕、参照。

27 鈴江言一『孫文傳』岩波書店、1950年〔初版は1931年〕、135-136頁。

28 高橋勇治『孫文』日本評論社、1943年、69頁。

29 林初耀、前掲論文〔注3〕。新聞報道では資料・論拠を十分に示さなかったのだから、疑問がでてくるのは当然であろう。ただ、林は日本語の新聞を読んでいるのではなくて、英語系の新聞記事をもとに批判しており、何故か終始「大月薫」を「元田小姐」と表現している。また、筆者の発表したこと以外の事柄についても非難をしている。

30 久保田文次・久保田博子「孫文と宋慶齡の結婚の時期について」『辛亥革命研究』1号、1981年。

31 林初耀、前掲論文〔注3〕は、孫宋結婚を1914年とする国民党刊行の『国父年譜』を、日本外務省記録によって1915年と訂正している。

32 中国国民党党史委員会他共編、羅家倫主編『国父年譜初編』上冊、1957年、81頁。

33 羅家倫・黄季陸主編『国父年譜 増訂本』上冊、中国国民党中央委員会党史委員会、1994年第四次増訂版、136頁。

34 馮自由『中国革命運動二十六年組織史』商務印書

館、1948年、35-36頁。

35 無名氏「温炳臣先生回憶 国父当年革命史実」王良主編『国父与横浜』初集、中国国民党駐横浜直轄支部、1995年、81頁；鄭彦芬「革命老僑温炳臣」前掲『国父与横浜』三集、180-182頁。

36 西木正明『孫文の女』文春文庫、2008年、263頁〔初出は『オール読物』2004年8月号、後、単行本〕。

37 「葵卯孫総理在日本情况」馮自由『革命逸史』初集、台湾商務印書館、1965年〔1939年初版〕192頁；「烏目山僧黄宗仰」同三集、170頁。「在横浜支持 国父革命的社団；振華商店」前掲『国父与横浜』初集、13頁参照。ただし、上村希美雄『宮崎兄弟伝 アジア篇中』葦書房、1996年、176頁以下の写真50、1903年9月12日の滔天宛孫文書簡は「横浜山下町二百四十番地振華方中山ヨリ」と、山下町の番地を明記している。三国浄春録音の明治三十八年孫文来日時住所「山下町の警察のそばの西洋館の二階」「お友だちの二階」というのに符合する。「警察」とは加賀町警察署である。代官坂とはちがうが、これはこれで121番地以外の孫文住居に関する馮自由の叙述を補強することにもなり、薫の証言の信頼性も維持されるのである。

38 馮自由『華僑革命開国史』台湾商務印書館、1975年、47頁。

39 注8に同じ。

40 陳錫祺主編、前掲書〔注21〕、282、287、290、294頁。

41 同上、338、358頁。

42 宮川東一、前掲書〔注1〕、9頁

43 小笠原謙三、前掲書〔注6〕、92頁、

44 「国会図書館桜井芳之助訪問大月薫之記録」（前掲『国父与横浜』三集、268頁、参照。林初耀前掲論文〔注3〕が引用している新聞は、「孫文先生はその後再び日本に戻ることはなかった」と書いているようで、林はその

後の孫文来日の例を挙げて筆者の「でたらめ」ぶりを非難するのだが(48頁)、日本語の新聞では「二人は以後会うことはなかった」と言っているだけで、以後に孫文が来日したことを否定しているのではない。現に同じ談話が1913年来日の時には会わなかったと述べているのだから、林の批判はまったく的を外れである。

45 陳錫祺、前掲書〔注21〕、766-791頁。横浜における動向については、「歡呼孫大人を迎ふ」『横浜貿易新報』1913年3月6日；「滯浜中の孫氏」『中華国民党招待会』同3月7日。なお「孫氏視察順序」同3月7日、には宋嘉樹を「鉄道會計長」としている。

46 小笠原 15 (小笠原謙三、前掲書〔注6〕?)、66頁；「中国国民党留日横浜支部民国二年三月六日歡迎理事長孫中山先生 紀念撮影」前掲『国父与横浜』初集。

47 前掲〔注11〕、宮川富美子手記。

48 前掲〔注44〕、268-269頁。

49 「孫氏の相撲見物」『朝日新聞』(東京)1913年3月3日。

50 沢村幸夫「孫文送迎私記」『支那』28巻8号、1937年、156-157頁。

51 「南京町 八 隠れ家」『朝日新聞』(東京)1913年12月11日。後に鹿目昇三『南京町』東京：鹿目初子刊、1924年、22-25頁。

52 前掲〔注44〕に同じ。

53 三浦千里、前掲論文〔注13〕、「II」、7頁。

54 1988年5月27日付、陳徳仁より宮川富美子宛書簡控え(神戸華僑歴史博物館所蔵、安井三吉氏恵贈)。

55 沢村貞夫、前掲書〔注50〕、156-157頁。

56 「孫氏夫人一行の奇禍」『朝日新聞』(東京)1913年3月17日付；「民国婦人跳ね飛ばさる」『都新聞』1913年3月17日付；「孫夫人等の奇禍」同、1913年3月18日付。

57 陳錫祺、前掲書〔注21〕、358頁、参照

58 林初耀、前掲論文〔注3〕。

59 「孫中山在日娶妻留下女兒被發現」『明報』1984年8月18日；「共同社談孫中山在日本的婚事；報刊文摘一九八四年九月四日」前掲『国父与横浜』三集、169頁。なお、前掲〔注4〕の『人民日報』参照。

60 前掲『横浜華僑誌』、859頁。

61 1982年4月3日付、洪桂己より宮川東一宛書簡(宮川家蔵)。

62 1982年4月23日付、同上。

63 1983年1月6日付、同上。

64 1988年3月29日付、陳徳仁より宮川富美子宛書簡控え。前掲〔注54〕参照。

65 たとえば「孫文に『遺児』がいた」『東京新聞』1984年8月18日等。「孫文二三事」王良主編『国父与横浜』四集、横浜中山学会、2006年、285頁等参照。

66 孫中山故居紀念館編『孫中山の親属与后裔』中国大百科全書出版社、2001年、21-25頁等。

67 楊名「孫文研究の新資料」前掲『国父与横浜』第三集、177-180頁。